




論文審査結果の要旨

論文提出者	(氏名) 坂 井 真実子
論文審査委員	主 査 池 邊 哲 郎 
	副 査 大 関 悟 
	副 査 沢 禎 彦 
論 文 題 目	骨格性下顎前突患者の側貌パターンの違いが術後の軟組織側貌の予測に与える影響
<p>(論文審査結果の要旨)</p> <p>骨格性下顎前突で外科的矯正手術を施行した患者101名の側貌セファログラムにおいて、硬組織および軟組織上の65の計測点を取り、2X2の計算ユニットの自己組織化マップによって、101名の患者をU1~U4の4つの側貌パターンに分類した研究である。その上で、手術によって顎骨を移動した際に、骨の移動に追従して移動する軟組織移動量を解析し、軟組織移動量の予測値(Wolford)と実際の移動量との差について、4つのパターンで比較したものである。</p> <p>4つの側貌パターンでは、下顎角のローアングル、ハイアングル、前下顔面高の過大、上顎骨の後方位などがパターンの基準になっており、ハイアングルで下顔面高の過大した側貌では、B点が予測よりも実際の方が後方に位置し、ローアングルの側貌では下唇の位置が予測よりも後下方に位置していた。</p> <p>外科矯正手術後の側貌を予測するための重要なテーマであり、坂井氏はその目的をよく理解して、研究計画をたてていた。自己組織化マップの理論をよく理解し、その手法をわかりやすく説明していた。ローアングルとハイアングルとの違いや下顔面高の過大が下唇の緊張度に影響し、軟組織追従量の誤差の原因になるかもしれないという興味深い結果を明らかにし、今後の治療上の工夫や患者への説明に有益な論文となっていた。</p>	